

# 学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

## 研究主題 思いや考えを生き生きと表現できる子どもの育成

～対話を通して考えを深める授業づくり～

### 高知市立横内小学校

#### 実践概要：

平成30年度から2年間の「学校図書館を活用した『読み』を鍛える拠点校事業」の指定を受けた。1年目は、全学年で学校図書館を活用した授業実践の校内研究・授業公開を行った。各学年が相手意識・目的意識を明確にした言語活動を設定し、「わかる」から「できる」を目指す単元づくりに取り組んだ。学んだことが実際に使えるようになることを重視する授業をつくっていく中で、互いの授業を見合い、教材の見方を深め、個々の授業力をブラッシュアップさせることができた。また、言語活動のバリエーションを増やすことにもつながった。2年目は、「国語科授業づくり講座」も兼ね、1年目の実践を引き継ぎつつ、新学習指導要領の趣旨理解を深めながら国語科の授業づくり・単元づくりについて学んだ。「単元で育てたい資質・能力の明確化」や「言葉による見方・考え方を働かせること」が授業づくり・単元づくりの中心となった。また、児童の自己調整力（自分で学習のサイクルを回せるようになる力）を育てるために、「個のめあて」と「振り返り」の重要性についても学び、児童が主体的に学ぶ手立てとして授業の中にその時間を確保できるよう努めてきた。

キーワード：単元で育てたい「資質・能力」の明確化、言語活動の充実、  
「わかる」から「できる」を目指す単元づくり、「個のめあて」と「振り返り」

#### 1. 研究仮説

以下の2点を意識して授業改善を進めることで、思いや考えを生き生きと表現できる子どもが育つのではないかと。

- 基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、さらに、その力を目的に応じて活用できる力に発展させる。
- 「書く」活動と「伝え合う」活動をつなげ、学習展開の中で対話を効果的に仕組むことにより、自分の考えや思いを構築させる。

#### 2. 実践方法

これまでの校内研究は「読む」領域に関するものが多かった。また、到達度把握調査の結果からは、「話す・聞く」・「書く」領域での弱さが見られた。そこで、第4学年では「話す・聞く」、第5学年では「書く」領域での「授業づくり講座」を行い、研究を深めることとした。その際、次の点に留意しながら授業づくりを行った。

- (1) 単元で育てたい「資質・能力」の明確化
  - ①1年間における横の系統の確認と6年間における縦の系統の確認を行う。
  - ②学習指導要領を基にした指導事項の確認を行う。
  - ③教科書教材の分析を行い、身に付けさせたい「知識・技能」を1時間1時間の授業の中にポイントとして組み込む。→(3)につながる。
- (2) 児童が本気になる課題の設定
  - ①相手意識・目的意識を明確にする。
  - ②実現可能なリアルな言語活動を設定する。
  - ③発信相手からのリフレクションがある活動を設定する。

(3) 「わかる」から「できる」を目指す単元構成

①教科書教材で習得したことをすぐに活用できる単元構成にする。「教科書教材と活用教材に交互に取り組む型」（資料1）や「1時間の中に活用教材を組み入れる型」（資料2）にするなどの工夫を行う。その際、発達段階や教材の特性を見極めて取り組む。

第一回	1	教科書教材
第二回	2	教科書教材
	3	関連読書教材・自作教材
	4	教科書教材
	5	関連読書教材・自作教材
	6	教科書教材
	7	関連読書教材・自作教材
	8	教科書教材
	9	関連読書教材・自作教材
	第三回	10

資料1 単元構成例①

第一回	1	教科書教材
第二回	2	教科書教材
	3	教科書教材
	4	教科書教材
	5	教科書教材
	6	教科書教材
	7	教科書教材
	8	教科書教材
	9	教科書教材
	10	教科書教材

資料2 単元構成例②

(4) 考えの視覚化→伝える→深める

- ①毎時間、自らの「めあて」とそれに対する「振り返り」を明確にもつ。
- ②自分の考えを文字に表し、対話に生かす。そして、考えの再構築につなげる。
- ③板書においても、出てきた子どもたちの考えが学習するポイントにつながるよう言葉と言葉の関連付けに留意する。

3. 実践内容

今年度「国語科授業づくり講座」において取り組んだ第4学年と第5学年の実践について振り返る。

・第4学年

「目指せ メモマスター！  
 ～3年生にわかりやすく伝えよう～」  
 (教材名 メモの取り方をくふうして聞こう  
 東京書籍 4年上)

(1) 単元で育てたい「資質・能力」の明確化

児童は、1年生では「大事なことを単語でメモをして聞く」、2年生では「大事なことを落とさずに短い言葉でメモをして聞く」、3年生では「目的に合わせて、まとめや順序に気を付けてメモをして聞く」ことを学習してきている。4年生の本単元では、これらの既習事項に「話のまとめや内容が分かりやすいように、記号や図、絵などを使ってメモを取る」、「理由を表す言葉に注意しながら聞く」、「必要に応じて質問する」ことが加わり、より話の組み立てや目的意識・相手意識をもって聞く力を育成することが求められると考えた。

(2) 児童が本気になる課題の設定

メモの内容を伝える相手や、メモを取る目的を意識させるために、自分のメモを基に口頭で「梅ジュースの作り方」を3年生に伝えるという言語活動を設定した。そのために「メモの取り方のポイントをつかんだり、メモを整理しながら質問したりする」学習をすることにした。

(3) 「わかる」から「できる」を目指す単元構成

3年生から「横内小学校伝統の梅ジュースの作り方を教えてください」と依頼が来るところから学習がスタートする。梅博士から梅ジュースの作り方を聞いてメモを取り、メモを基に3年生に伝えるに当たって、メモについての経験や既習事項を振り返ると、「メモを取ったり、詳しく書いたりすること、質問することに自信がない」といった課題が出てきた。そこで、それらのことができるようになれば、3年生に分かりやすく伝えることができそうだという見通しをもたせた。

①メモのポイントをつかむ、②理由の必要性やポイントをつかむ、③質問の仕方をつかむ、の3点において教科書教材でポイントをつかみ、それぞれの授業の後半部分において、オリジナル教材「梅ジュースの作り方」で活用を試みた。

(4) 考えの視覚化→伝える→深める

授業の前半で、毎時間の学習するポイントにおいてその時間に何ができるようになりたいかという個人の「めあて」を書かせるようにした。そして、授業の終わりには「めあて」について振り返る時間を設けた。

また、毎時間、自分が取ったメモに学習したポイントを付け加え、ペアの友達にその内容を伝える時間を設けた。その時に互いに相互評価やアドバイスをさせた。

・第5学年

「光れ 飛べ 横内のホテル  
 ～地域の人に伝えよう～」  
 (教材名 資料を生かして考えたことを書こう  
 東京書籍 5年)

(1) 単元で育てたい「資質・能力」の明確化

児童は、4年生の3学期に、本教材と同系統である「目的や形式に合わせて書こう」において、目的と形式に合わせて資料を選び、給食の調理員さんや売店の方への感謝の気持ちを伝えるポスターを作る学習を行った。しかし、5年生の4月に実施された到達度把握調査の結果などから見て、読み取った情報の中から必要な情報を取捨選択したり、それらに関係付けたりして、資料を活用した文章を書くことに課題があることが分かった。高学年になると、学習や生活の中で様々な種類の資料に触れる機会が増える。資料を読み取るだけでなく、資料を自分の表現に活用することは、自分の考えを効果的に相手に伝えるために重要である。特に、事実と考えを区別して整理し、説得力があるように書く力には課題があるため、本単元では重点的に取り組みたいと考えた。

既習事項に加え、「伝えたいことを明確にし、書くことを選び、集めた資料に関係付ける」、「図表やグラフ等を用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」、「目的や意図に応じて、事実と意見を区別して書く」ことを指導することとした。

(2) 児童が本気になる課題の設定

文章全体の構成や展開を考え、目的意識・相手意識をもって書く力を育てるために、校区の環境をよりよくするための意見文を書き、保護者や地域の方に呼びかける活動を設定した。一人一人が校区にある鴻の森から流れる楠谷川のホテルについて考え、ホテルの置かれた状況を改善するための意見文を書くことにした。

(3) 「わかる」から「できる」を目指す単元構成

単元全体は、国語科で学習したことを総合的な学習の時間の発信に生かすという教科横断的な単元構成とした。

まず、森林学習や甫喜ヶ峰での校外学習、楠谷川のホテルの学習を振り返った後、教科書教材を基に作成した教師モデル「森林を守ろう」を見ることにより、「横内のホテルを守る」ための発信の仕方のゴールイメージをもつ。

そして、第二次に入ると、教科書教材でポイントをつかんだら、すぐにそのポイントを生かして自分の「ホタルを守る」意見文を書くという単元の流れにした。①資料の種類による特徴や効果をつかむ→「ホタル」について学習した複数の資料を整理・分類しながら、発信したいことを決める、②意見文の論の進め方をつかむ→「ホタルを守る」意見文の構成メモを作成する、③写真資料（アップとロング）やグラフ・絵図等の具体的な数値が示されている資料で説明の書き方のポイントをつかむ→「ホタル」の説明を書く、④結論の述べ方のポイントをつかむ→「ホタルを守る」意見文の結論を書く、という流れにした。

#### （４）考えの視覚化→伝える→深める

４年生と同じく、授業の前半で、毎時間の学習するポイントにおいてその時間に何ができるようになりたいかという個人の「めあて」を書かせるようにした。そして、授業の終わりには「めあて」について振り返る時間を設けた。

また、自信をもって発信できるようにと、でき上がった文章が学習したポイントを使って書けているか、毎時間、友達同士で相互評価をさせ、互いの文章のよいところを見付けて伝え合った。

## ４．成果と課題

- （１）単元で育てたい「資質・能力」の明確化
- （２）児童が本気になる課題の設定
- （３）「わかる」から「できる」を目指す単元構成について

単元で育てたい「資質・能力」を明確にすることを通して、児童に付けたい力を身に付けさせるためには、単元全体を構想することが大事であるということ学んだ。１年間及び６年間の系統の確認から始まり、学習指導要領に示された指導事項の確認、教材分析を行い、毎時間の授業の中に付けたい力をポイントとしてどう組み込んでいくのか、「わかる」から「できる」をどのようにつないでいくのか、ということ教員が考えるようになった。また、子どもたちが単元を通して意欲を途切れさせることなく取り組めるようにするゴール意識（相手意識・目的意識）・言語活動の大切さも学んだ。

１２月に行われた高知県学力定着状況調査では、４年生（「話す・聞く」）、５年生（「書く」）それぞれの、「国語科授業づくり講座」で取り組んだ単元と関連する問題において次のような正答率となったことは成果と言える。

#### —４年生—

○必要な事柄について、調べたことの要点をメモする。

自校正答率 61.9%

県正答率 54.8%

○相手や目的に応じて、理由や事例を挙げながら筋道を立てて話す。

自校正答率 64.9%

県正答率 57.2%

#### —５年生—

○与えられた情報を読み取り、目的に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする。

自校正答率 66.8%

県正答率 65.3%

○事実と意見を区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする。（２つの案のうち、どちらがよいと思うかを書く。）

自校正答率 90.9%

県正答率 88.7%

○事実と意見を区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする。（よいと思った理由を、選ばなかった案と比べながら書く。）

自校正答率 85.9%

県正答率 77.6%

一方、課題としては、次の点が挙げられる。

- 図を用いて、自分の考えが伝わるように書く。
- 表現の仕方をよりよくするために助言する。
- 与えられた情報を読み取り、表現の効果を確かめる。

本校の児童の多くは、「書く」ということ自体にあまり抵抗はない。しかし、「条件に合わせて書く」、「根拠を示しながら筋道立てて書く」ということにおいては、どの学年においても弱さが見られる。学んだことを日常的に使いこなす場の設定が必要である。指導改善のポイントとして次のような手立てが考えられる

☆「書くこと」の指導において、相手意識・目的意識・意図をもった「書く」活動を日頃から仕組んで行う。

☆要旨・要約を捉える力として、説明文や書く学習において、キーワードや主語を意識させる指導を行う。

☆目的や必要に応じて、事実を挙げて書く・事実と感想、意見などを区別して書くことを行う。

☆短作文を書く時には、常に自分の考えをもち、まず結論をまとめて述べるという習慣付けをする。

☆説得力のある書き方（資料からの引用・具体性・比較）を使う場面を意図的に作る。

☆文章を読み直す習慣付けをする。

これらのことを日常的に指導者が意識し、授業の中で繰り返し児童に行わせることで付けたい力が定着することを全教職員で共有した。

また、「言葉による見方・考え方を働かせる」ということについては今後も研究を深める必要がある。

(4) 考えの視覚化→伝える→深めるについて  
 自己の「めあて」を立てるようになると、学びが「自分ごと」となり主体的に学習を行えるようになるとの松永立志先生のご助言から、授業の中に自分の「めあて」を立てる時間を設けるようにした。



写真1 自分の「めあて」を立てている様子

取り組み始めはどのような「めあて」を立てればよいのか戸惑っていた児童が多かったが、次第に授業のポイントに関わる「めあて」が書けるようになってきた。

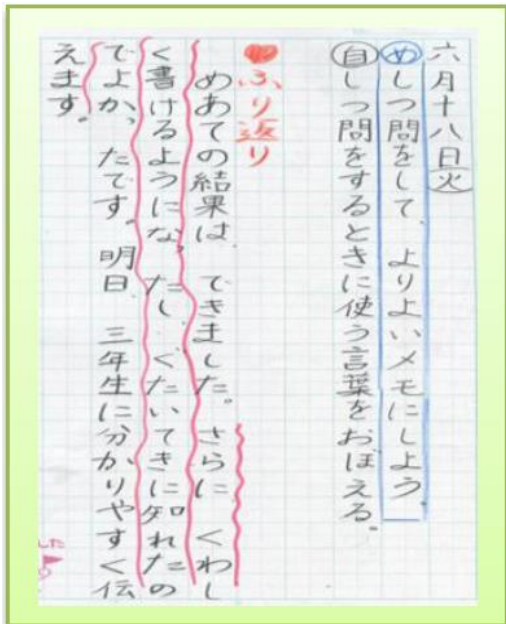


写真2 児童のノート  
 (「個のめあて」と「振り返り」)

また、「個のめあて」に対する「振り返り」を行うことで学習の積み上がりや自己の成長を感じたり、次時への課題意識をもてたりする児童が増えた。



写真3 本時のポイントとなる事柄をメモに付け加えている様子

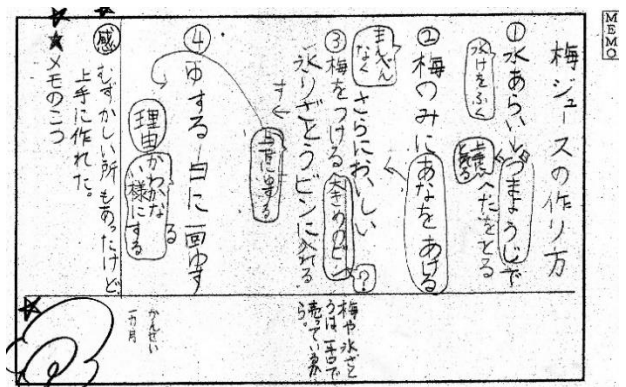


写真4 「メモの取り方のコツ」を学習することによってポイントを付け加えたメモ

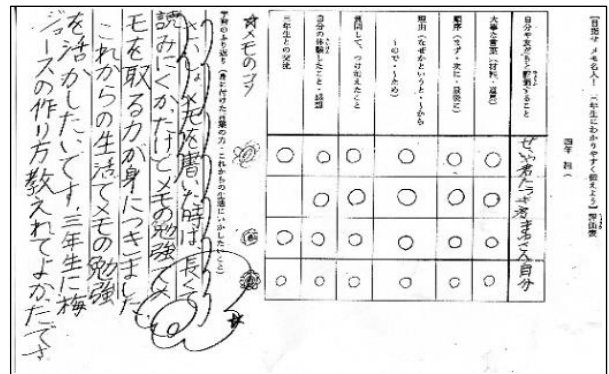


写真5 評価表

書いたものを基にして、ペアやグループあるいは全体で伝え合う時間を設定することはスタンダードになってきた。その話し合い活動を通して、考えを深めたり、新たな見方を発見したりして欲しいと取り組んでいるが、書いたものを読むことで終わってしまっていることが多く、考えを練り合うところまではなかなか到達しない現状がある。今後、対話において考えが深められるような手立てを考えていく必要がある。



写真6 グループで話し合う様子

来年度は、次の3点を大切にしながら校内研究を進めていきたいと考えている。

- 付けたい力(資質・能力)を明らかにした(縦と横の系統)単元づくりになっているか。
- 児童が主体的に考えようとする課題設定になっているか。(単元の言語活動、毎時間のめあてと振り返りの整合性)
- 思考を深める手立てはあるか。その手立ては有効に働いたのか(新たな見方・考え方は育ったか)。

今年度「国語科授業づくり講座」で学んだことを今後の実践に生かしていきたい。